
香川大学・ICEDS シンポジウム
「＜徳川の平和＞を考える—萌芽・維持・消滅—」
日時：2019年11月3日日曜日
13時～18時 (シンポジウム), 18時～19時(交流会)
場所：幸町北キャンパス・研究交流棟5F/研究者交流スペース

シンポジウムの趣旨

東欧革命から30年、国民国家を超える政体であるEUは試行錯誤の過程の中で大きな試練を迎えている。英国は離脱宣言をし、さらに、移民問題から発したナショナリズムの台頭によって移民排斥を訴える極右政党が目白押しとなり、EUは大きな危機を迎えているからである。しかし、二度の世界大戦を勃発させたヨーロッパでは、その反省に基づき、自国一国主義を乗り越えるべく、今もなお国民国家を超えた新しい政体の将来ビジョンとそこに向かおうとする理性に期待する声も大きい。

他方で、アジアはどうであろうか。アジア各地でのヨーロッパ列強による植民地化の後に、引き続き植民地支配を広げたのは日本である。その日本は昨年奇しくも政府が一丸となって明治150年を祝った。なぜか。さらにこれらの行事を伝える報道や「平成の薩長土肥連合」のような地域団体はこの記念行事を明治維新150年と読み替えていた。「近代」への、そしてその後の歴史過程を再検討する歴史研究あるいは従来とは異なる視角から歴史に新たな光を投げ込もうとする環境史研究もそこに加わった現在、「近代」はもはや無反省には受け入れられない存在となっている。「近代」が生み出した数多くの恩恵を受け入れたとしても、昨年のように、単純に明治150年を祝うような政治的姿勢は、歴史を知らない人々の愚行のように見えた。

次世代に向けた本当の将来ビジョンとは何か。日本の国民は小説やドラマでは戦国時代、徳川時代そして明治維新を愛でつつも、実はその本質を見通せてはいない。日本の歴史を問い直すには、徳川時代、その成立過程と持続過程そしてその後の歴史にもう一度新たな脚光を浴びせ、多様な歴史理解の存在を知ることが必要である。そのことがこの日本で二度と明治維新を政府が主体的に祝うようなことが繰り返されないようにする道ではないであろうか。

いかに徳川時代は生み出され、その後、ペリーの来航まで250年間続いた平和の時代に通底するもの、そしてその持続を可能にした要素、さらにそれが欧化思想の下で一気に西欧化が進んだ理由、そして、戦争を放棄するという英断を進めた徳川時代を振り捨て二度の世界大戦を引き起こす歴史の道を共有することになったのはなぜか。

この問いに可能な限りで回答を与えようというのが本シンポジウムである。

(文責：村山 聡)

主催：香川大学地球ディベロプメントサイエンス国際コンソーシアム(ICEDS=アイセッツ)

共催：香川歴史学会

後援：WHB(世界の歴史と地理のリベラルアーツ)の会